

## ADBのアジア経済見通し改訂版発表 中国は投資と融資が増大、経済回復が早まる見込み

【香港、2009年9月22日】アジア開発銀行(ADB)が本日発表した「[2009年アジア経済見通し改訂版](#)」\*(ADOU 2009)によれば、世界経済の減速の影響で本年第1四半期に20年来の低水準に落ち込んだ中国経済は、第2四半期に回復、2009年・2010年の成長率はともに8%を超える見通しとなった。

それによると、中国の2009年のGDP伸び率は、銀行融資と固定資産投資の急増を背景に、ADBが本年3月に発表した7%から1.2ポイント上方修正となる8.2%を達成する見込みである。さらに2010年の成長率は、政府が財政刺激策を継続し、世界経済もやや持ち直すとみられることから、8.9%まで回復するとみられる。

ADBの李鍾和(Lee Jong-wha)チーフエコノミストは、「中国では、昨年発表された大規模な財政出動による景気刺激策と、本年に入ってから思い切った金融緩和が実施され、世界不況の影響は軽減された。中国政府が年初に掲げた本年の成長率8%という目標は達成されると思われる。2010年についても、中国にとって長期的に持続可能な成長率である約9%という数字が視野に入ってくるだろう」としている。

ADOUによれば、中国経済の本年第1四半期の伸び率は6.1%に落ち込んだものの、第2四半期に7.9%まで急回復、上半期としては7.1%となった。半年間にこれだけ拡大した背景には、7.1%成長の6.2ポイントを占める投資による牽引が大きい。消費の貢献度も3.8ポイントあったが、輸出の純減マイナス2.9ポイントに相殺される形となった。

このうち固定資産投資については、大型の景気刺激策による効果と、信用の急拡大を受け、第2四半期で実質41.2%と前年同期比で27ポイント上昇したほか、農業やインフラ、保健・社会保障の公共事業関連投資も急増した。

さらに、政府の金融拡大方針に伴い銀行による新規融資も増え、本年上半期の対GDPシェアは約5割と、過去2年間の平均貢献度より倍増した。融資を受けているのは主に国有企業と大手民間企業だった。

一方、鉱工業生産についても、2008年後半から2009年初めまでの最悪期に大幅な在庫調整が進んだ各企業が在庫の再積み増しに着手していることから第2四半期にモメンタムを回復。しかし外需が弱いほか、鉄鋼・セメント・機械などの産業で設備過剰があり、2009年1～5月期の企業の利益総額は22.9%下落した。

また、貿易黒字については、輸出の大幅減と輸入の低迷に伴い、2009年第2四半期に過去3年間で最小の規模(349億ドル)に縮小する一方、都市部と農村部の双方において家計の実収入が堅調に伸びたことから消費増が目立ったとADOUは指摘している。

物価については、2009年の大半を通じて穏やかなデフレがみられるが、2010年は経済成長が高まるため、3%程度のインフレを予測している。

中国の2010年の成長を支える要因としては、インフラ投資、建設、消費拡大などが主な牽引役となろう。世界経済の回復見通しが力強いとは言えないことから、成長に対する純輸出の貢献度は低いものとどまろう。

反面、成長に対するリスク要因として、世界経済の回復が現在の見通しより著しく遅れた場合、および中国国内において政府が財政刺激策からの出口戦略を予定より早めた場合が考えられる。銀行融資の増大が長期化した場合も、金融引締めへの反転につながり成長の足枷となる懸念も残っている。

\* ADBが毎年3月に発表している「アジア経済見通し」(ADO)の最新版として毎年9月に発表される。